

藤本博著  
『ヴェトナム戦争研究』  
——「アメリカの戦争」の実相と戦争の克服——

(法律文化社、2014年)

松 岡 完

## はじめに

屈辱に満ちた米軍のヴェトナム撤退から、そしてヴェトナム戦争 (Vietnam War) 終結からも、40年を超える歳月が経過した。アメリカはこの負の記憶と、それがもたらしたヴェトナム症候群 (Vietnam Syndrome) と呼ばれる後遺症を乗り越えて、米軍を海外に送り、世界の秩序を維持する努力を積み重ねてきた。その結果、ヴェトナムはいまやたんなる「泥沼 (quagmire)」の象徴に矮小化されてしまった感がある。今日のアメリカは、あの二の舞を避けられさえすれば軍事行動にともなう問題など即座に解決する、とでもいわんばかりである。

実際に、いわゆる9・11後に攻撃したアフガニスタンの国内が、米軍が手を引いた後にどうなろうと米国民はたいして気にも止めなかった。あるはずの大量破壊兵器が存在しなかったイラク戦争 (Iraqi War) は、サダム・フセイン (Saddam Hussein) の抹殺によって正当化され、忘却の彼方に押しやられようとしている。オバマ (Barack Obama) 大統領によるシリア介入を押しとどめたのは、独裁や弾圧がシリア国民にもたらした苦難に目を向けることなく、ひたすらアメリカ人の犠牲を忌み嫌う議会と国民の強い意向だった。

こうした現実の根底には1つの単純な事実がある。ヴェトナム戦争とはいったい何だったか、そしてアメリカはそこで何をしたのかという歴史的経緯の検証も、文化的背景への洞察も、真摯な反省もほぼ置き去りにしたまま、この超大国が40年あまりの歳月を過ごしてきたということである。それゆえにこそ、ヴェトナム戦争の実相を明らかにすること、それを新たな観点から見つめ直すことが求められよう。本書のめざすところもまさにそこにある。

## 1. 過去と現在の対話

本書は3部構成となっている。その構成は以下のとおりである。

序章 研究対象、問題の所在、本書の構成

第1部 「アメリカの戦争」としてのヴェトナム戦争の実相と「ソンミ虐殺」

第1章 アメリカのヴェトナム軍事介入の特徴とヴェトナム民間人犠牲の実態

第2章 「アメリカの戦争」の象徴としての「ソンミ虐殺」と南ヴェトナムにおける戦争

### の実相

- 第2部 アメリカ国内外における「アメリカの戦争犯罪」告発の展開とその歴史的意義  
—— ヴェトナム戦争期における「戦争の克服」の試み
- 第3章 国際社会における「アメリカの戦争犯罪」告発の開始——「ラッセル法廷」(ヴェトナム国際戦争犯罪法廷)とジョンソン政権の対応
- 第4章 米国内における「ソンミ虐殺」露見とヴェトナム帰還兵による「戦争犯罪」告発  
——「全米帰還兵調査会」から「冬の兵士」調査会へ
- 第5章 1971年半ば以降におけるVVAWによる「アメリカの戦争犯罪」告発の国際的活動の展開とニクソン政権の対応
- 第3部 ヴェトナム戦争後における「ヴェトナムの記憶」と「戦争の克服」をめぐる諸相
- 第6章 ヴェトナム戦争後の米国におけるヴェトナム戦争の記憶——「加害」の記憶の封印・忘却と継承の相剋
- 第7章 「マディソン・クエーカーズ」(Madison Quakers, Inc.) プロジェクト(1)——  
ヴェトナム民衆を対象とする「戦争の克服」と「和解・共生」
- 第8章 「マディソン・クエーカーズ」プロジェクト(2)——アメリカ・ヴェトナム両  
国の枠を越えた「和解・共生」への普遍的試み
- 終章 「終わりになき」ヴェトナム戦争——ヴェトナム帰還兵による「アメリカの戦争犯罪」  
告発の遺産と「ソンミ虐殺」をめぐる記憶継承、「マディソン・クエーカーズ」プ  
ロジェクトの今日的可能性

第1部は、アメリカ的な戦争遂行方法そのものがヴェトナム民間人に膨大な犠牲をもたらした典型例、すなわち1968年のソンミ虐殺事件を分析する。第2部は、アメリカ政府がヴェトナム戦争中から、この戦争につきまとう負の側面を克服すべく尽力していたことをつまびらかにする。第3部は、ヴェトナム戦争後のアメリカを描写し、ヴェトナム民間人が被った犠牲という観点から、希薄化の一途をたどるアメリカ側の加害意識について検証する。本書がそこで展開する試みとは、ヴェトナム戦争の戦中から戦後にかけてアメリカとヴェトナムがたどった歩み、その相互関係を明らかにすることで可能になる、過去と現在の対話にほかならない。

## 2. ヴェトナム戦争研究の新たな地平

本書は、アメリカを含む諸国の政策決定過程や戦争拡大過程に焦点を当てた従来のヴェトナム戦争史研究とはひと味違う、新しいヴェトナム戦争研究の形を提示している。

著者はアメリカ外交史研究者の立場から、アメリカのヴェトナム戦争遂行の実相を明らかにし、同時にヴェトナム民間人の犠牲に焦点を当てようと尽力する。その手法は、アメリカとヴェトナム、その双方にとってのヴェトナム戦争像を解き明かすことで、いわば2国間にまたがる歴史を再構成することである。

その特質は、冷戦史研究の最新動向を十分に踏まえ、これをさらに一歩進めたところにある。

具体的には、第1に米ソ関係史ではなく、同盟関係内部や第三世界との関係も含めた、総合的な歴史叙述。第2にアメリカを客体、つまり外界からの影響を受ける存在としたうえで、アメリカ＝外界間の相互関係の検証。第3に政治・経済・軍事面ばかりでなく広く社会・文化的要素も考慮した、重層的な現代史理解である。

しかも本書は、アメリカ政府の公刊・未公刊文書、反戦運動に携わったさまざまな組織や個人が保有する貴重な文書など、幅広い一次史料を駆使した、きわめて実証性の高い研究である。本書による一次史料の渉猟はカナダ・イギリス・日本などにも及んでいる。

本書はまた、戦中も戦後も看過されがちだったテーマに挑んだ、独創的な研究でもある。

その第1のテーマは、ヴェトナム戦争がアメリカ社会に与えた変容と、アメリカ社会が戦争に与えた影響、すなわち戦争と社会が及ぼし合った思想的な影響である。

本書によれば、冷戦コンセンサスの崩壊、正義はアメリカにありとするアメリカ伝統の戦争観に対する挑戦、アメリカ外交の正当性や道義性への問いかけ、戦争の非人道性とりわけ民間人の犠牲者についての認識などが、ヴェトナム経験によってもたらされた。逆に、アメリカ国内で進む人種差別の制度化が、戦争遂行や戦場での兵士の行動に影響を与えた。

第2のテーマは、アメリカ国外の反戦運動が、国内の反戦運動に及ぼした影響や遺産、とりわけ両者の連携、そこに表出された双方向の影響のメカニズムである。

たとえば本書は、1967年のいわゆるラッセル法廷 (Russell Tribunal) がアメリカを厳しく非難してからほぼ2年後、アメリカ国内でソンミ虐殺糾弾をはじめとする戦争犯罪告発が顕在化したことを重視する。その結果、兵士たちの生々しい証言をつうじて、虐殺が日常的にまた広範囲に行われていたこと、その根底にはアメリカ社会の人種差別があったことなどが裏づけられた。それが停滞気味だった反戦運動に活気をもたらし、戦争のさなかにもかかわらず反戦帰還兵・現役兵によるアメリカの戦争犯罪告発の動きを活性化させた。

ラッセル法廷と、元兵士も加わったアメリカ国内の反戦運動は、国際的連携を強めた。その結果、反戦・平和運動の国境を越えた人的ネットワークが構築されていった。そこに北ヴェトナムや南ヴェトナム臨時革命政府、ラオス・カンボジアの解放勢力の人々などさえ含まれていた。自分たちが国際的な支援を受けているということが、アメリカ国内の反戦運動の活動に力を与え、それがいっそう国外との連帯意識を強めさせた。

ラッセル法廷はアメリカの世論に影響を与えることで、間接的に戦争終結に貢献したといえる。しかもそれは、ヴェトナム戦争後のアメリカにも、ヴェトナム民衆との連帯・癒しを求める感情を残した。ヴェトナムあるいはヴェトナム人という「他者」と関わる新たな視点が、アメリカにもたらされたのである。ヴェトナム戦争はアメリカを変えた。ヴェトナム反戦運動もまた、国際社会と連動しながらアメリカを変えたのである。

### 3. ヴェトナム戦争の実相把握に貢献

本書はアメリカの戦争としてのヴェトナム戦争の実相のいくつかを明らかにしている。

第1に、戦争中に露呈したほぼ唯一の民間人虐殺であるソンミ事件は、けっして一過性の孤立した虐殺ではなく、きわめて日常的・無差別に生じていた事象の1つだった。

そもそもヴェトナム民間人に多大な犠牲が生じた原因は、アメリカによる戦略爆撃や策

敵撃滅作戦にあった。本書は、ソンミ村がきわめて民族解放戦線の勢力の強い地域にあったことに注目する。この事件は、策敵撃滅作戦が最も必要とする場所で発生した。つまり虐殺とは、自由砲爆撃地域内の民間人をことごとく敵として扱う戦い方——戦争という巨大な殺戮行為を構成する重要な一要素——の当然の帰結だった。

アメリカの戦争政策はもともと戦争犯罪的な性格を持っており、そのきわめて意図的・系統的な適用がソンミ村事件だった。革命戦争の本質を見誤ったアメリカは、その政治目的を敵に強制する手段として、民衆に基盤を置く民族的抵抗の抑圧、そのための焦土作戦や民間人への攻撃をエスカレートさせた。しかも、戦略爆撃や策敵撃滅の限界が明らかになった後も、延々同じやり方が継続された。東南アジアでの中国の影響拡大などのゆえに、サイゴン政権の崩壊がとりもおさずアメリカの威信喪失、グローバルな安全保障・外交戦略の齟齬を意味するからであった。だがアメリカがそのてこ入れを図ろうと戦いを激化させればさせるほど、肝心のサイゴン政権はますます脆弱性を増していった。

本書の主張に従えば、ソンミ虐殺はアメリカ式戦争、あるいはアメリカ的戦争の本質の表出である。その根底には、東京大空襲や広島・長崎への原爆投下にも通ずるものが見受けられる。アフガニスタンやイラクでアメリカが、破壊力によって敵に恐怖を与えることを目的とする手法に依存していることも、同じ文脈で語ることができよう。

第2に、虐殺事件や反戦運動への対応は現代アメリカ政府の本質を浮き彫りにした。それは戦中も戦後も一貫していた。

たとえば虐殺事件について、アメリカ政府はもっぱら真相の秘匿や、悪影響拡大の阻止に専念していた。軍上層部を含む、リンドン・ジョンソン (Lyndon B. Johnson) 政権〜リチャード・ニクソン (Richard M. Nixon) 政権の対応は、真摯な反省とも、事件再発防止のための努力とも、まして責任をとることとも無縁だった。

ラッセル法廷によるアメリカ糾弾についても、アメリカ政府は関心を抱き、情報収集に努めていたが、公的には無視し、その権威失墜と信憑性・影響力低下を画策した。アメリカ軍は民間人を攻撃しないのだとの主張を繰り返し、表面化した虐殺は下級兵士に責めを負わせた。むしろ敵側の残虐行為や国際違反を糾弾した。元アメリカ軍兵士による告発の信憑性をおとしめ、反戦運動を抑えようとした。

ヴェトナム戦争終結以降に残された負の記憶について、歴代アメリカ政府は記憶の封印と克服をめざす内向きの努力を進めてきた。その結果、アメリカ国民が抱いた加害者たる意識は時を追って希薄化した。彼らはもっぱら自分たちの癒しを求めた。国家レベルでヴェトナムの記憶が再構築された。元兵士は英雄に祭り上げられた。強く正しいアメリカ像の復活と歩調を合わせて、国民も愛国心を取り戻していった。

#### 4. 時間と空間を越えて

本書はさらに、大きな時間的・空間的な広がりを有する研究の成果である。その広がりの第1は、時間的な発展性、すなわち今日性である。

本書はとくにラッセル法廷およびその遺産・継承に脚光を当てている。実際に、アフガニスタンでもイラクでも、ヴェトナムを彷彿とさせるような事象が生じている。民間人へ

の無差別攻撃、捕虜虐待などの発生、帰還兵の会・冬の兵士（Winter Soldiers）公聴会といった組織による反戦の動きなどである。アフガニスタンやイラクに限らず、1990年代の旧ユーゴスラヴィア内戦やルワンダなどでも、ラッセル法廷をモデルとした国際民衆法廷の試みが展開されている。

本書が、アメリカにとっての他者すなわちベトナム民衆が被った犠牲を視野に入れた、長期的な「和解・共生」創造の必要を訴えていることも、アメリカ外交に対する重要な提言である。ベトナム戦争終結から40周年という節目を前に本書が刊行（2014年12月）されたことには大きな意義がある。

いや、そうしたタイミング以上のものがあるといえるだろう。ベトナムがいまも生きた問題であること、また生き続けさせなければならない問題であることを痛感させられるという意味で、そして将来にわたって国際的次元における平和創造、戦争の克服につながるという意味で、本書が持つ意義はじつに大きいからである。

拡がりの第2は、空間的な発展性、すなわち普遍性である。

戦争の克服にせよ、和解・共生の創生にせよ、相手とすべきは世界中で蔓延している暴力とそれを生み出す無知であり、現代戦争そのものの本質に由来する問題である。とすれば問題はベトナムに、あるいはアフガニスタン・イラクに限られない。けっしてアメリカだけの問題でもない。空間的には、アメリカ＝ベトナム関係を越えた、グローバル性を持つ問題なのである。

## 5. なお残された課題

本書が重視するのは、反戦運動を含むベトナム戦争の記憶を継承する試みと、それに付随して他者との共生をめざす動きである。だがそこには1つの限界があるように思われる。端的に言えばそれは内向きの、アメリカ本位の歴史解釈にすぎないからである。それは本書の記述からもうかがわれる。

第1に、もともと反戦運動の基本は、戦争の是非というより、アメリカ人の生命への関心、つまり戦死者増を含むアメリカ人の犠牲増大を止めたいという切実な気持ちにあった。米軍がベトナム撤退を実現した時点で、アメリカ人はベトナムへの関心を失った。

第2に、反戦運動も、戦争の記憶克服も、アメリカがほんらいあるべき正しい姿を想定し、ベトナム戦争がそこからの逸脱にすぎないという考えから出発していた。裏を返せば、ほんらいの理念を取り戻しさえすれば、この国は再び正義の国となり、この国が行う戦争も正義の戦争となる。いわゆる9・11以降、ことにそれが顕著になった。

第3に、ベトナム敗戦後にアメリカが求めたのは、負の記憶からの解放と、精神的な癒し以上のものではなかった。戦後、とくに米越国交樹立後、アメリカの元兵士がベトナムを訪れてはかつての戦場に足を運ぶことが多かった。だが兵士としての行動への反省やベトナム人への謝罪は、たとえあっても二の次、三の次にすぎなかった。行方不明兵（MIA）の搜索に熱心なあまり、ベトナム人墓道を掘り返すなどの行為も同じである。

第4に、レーガン（Ronald Reagan）政権以降、政府内外で進んできたベトナム戦争の記憶改変は、アメリカ人の加害者意識を希薄化させ、それどころか加害者から被害者へと



いう自己認識の転換を可能にした。本書はオバマ政権下での兵士英雄化の試みに着目するが、それも1980年代から一貫して行われてきたものの延長上にある。

第5に、戦争反対や戦争犯罪告発を試みた人々ですら、その呪縛から免れていなかった。反戦・アメリカ批判の急先鋒だったラッセルが、アメリカが再び「個人の自由と社会主義の砦」となることを切望したこと。反戦組織の名称「冬の兵士」がアメリカ独立戦争 (Revolutionary War) に由来し、愛国心を基本にすること。戦った者どうしの和解と共生を求める「マディソン・クエーカーズ・プロジェクト (Madison Quakers Project)」の中で、主宰者が南北戦争 (Civil War) にちなむ曲『Taps』や『Ashokan Farewell』をバイオリンで演奏したこと。

こうした反戦運動や他者との共生をめざす運動が抱える限界ないし弱点をどう考えるか。それはなおわれわれに残された課題の1つだろう。

本書はまた、戦った者どうしの和解と共生の実現に大きな期待をかける。だがそれを具体的に、いかなる道筋でもたらすのかという難問には答えるにいたっていないことも事実である。

たとえば本書はマディソン・クエーカーズ・プロジェクトの中に、ベトナム人の死者もアメリカ人の死者も同じであるという意識の創成を見る。換言すれば、ベトナム人を虫けら同然ではなく人間として扱うという大転換である。

だが本書も指摘するように、その際おそらく最大の障害となりうるのは、怪物もどきの強大さを備える、アメリカ例外主義的な思想である。戦うことでこの世に生を受け、200年以上も戦い続けてきた「戦争国家」の中核をなす精神が、一貫する、難攻不落ともいえるアメリカの内向き傾向の原動力であり続けてきた。このような国に、本書のいう多文化共生の理念が根づくことが、はたしてありうるのだろうか。アメリカ＝ベトナム間のそれが少なくとも戦後半世紀近く時日を要したことは、その困難さを示してあまりあるといえよう。そしてまさにそれゆえにこそ本書が必要とされるのである。

## おわりに

2015年4月のこと。1975年にアカデミー最優秀長編ドキュメンタリーに選ばれ、末期のベトナム反戦運動にも大きな影響を与えた映画が日本で上映された。『ハーツ・アンド・マインズ——ベトナム戦争の真実 (Hearts and Minds)』(1974年)である。2009年に続くリバイバル上映ということになる。

じつは前回のリバイバル上映やDVD化(2010年)に関わった評者のもとにも、主催者から招待券が届いた。しかし諸般の都合で上映館まで足を運ぶことができなかった。そこで開講直後の大学での講義で、ベトナム戦争終結40周年について触れた後、観たい人には招待券を進呈すると伝えた。教室は、20世紀の国際関係史を学ぼうとする学生約200人で満杯だった。だが映画を観たいと申し出た者は——皆無だった。

彼ら20歳前後の世代にとって、ベトナム戦争など大昔の、よその世界の出来事にすぎないのか。イラクやアフガニスタンの現状にも、アメリカと世界の将来にも、そして国際社会における日本の役割にとっても重要な関わりを持つテーマだという私の言葉は、学

生諸君の心にまったく響かなかったのか。心底愕然とした。そして悄然とした。

にもかかわらず、いやそうであればなおのこと、いまこそ評者は本書をとりわけ若い世代に強く推奨したい。ヴェトナム経験はいまも生きている。その記憶は今後もけっして風化させてはならない。それが本書の強烈なメッセージだからである。この負の記憶の継承や、アフガニスタン・イラクとの関わり、かつての敵国民どうしの和解と共生の模索などを論じた終章に著者が冠した名——「終わりなき」戦い——こそ、この不毛なヴェトナム戦争を描写するにふさわしい表現であろう。